

トヨタ財団レポート

THE TOYOTA FOUNDATION REPORT

ISSN 0389-1984

〒163-04 東京都新宿区西新宿 2-1-1

新宿三井ビル 37F

Phone:03-3344-1701(代)

Fax:03-3342-6911

No.79

May 1997

1997 年度事業計画と基金増加について

去る 3 月 25 日の第 80 回理事会において 1997 年度の事業計画が決定した。また、3 月末にトヨタ自動車より今後の財団基金積み増しについて決定があった。

基金積み増しは段階的に行われるため、当年度の事業内容は概ね昨年度の事業を継続するものであるが、いくつか新しい取り組みについても紹介したい。

●97 年度事業の概要

3 月の理事会時点では前年同様、緊縮財政を基調とする予算が承認された。本年度の助成金総額は 4 億 2,900 万円を予定している。昨年度の 4 億 700 万円に対して微増ではあるが、これは国際助成、東南アジア研究地域交流プログラム助成、インドネシア若手研究助成、翻訳出版促進助成など一連の「東南アジア関連プログラム」での昨年に比べての円安の状況を見込んでの増分による。また、「計画助成」においても予定される案件の増加にもとづき 1 千万増の 5 千万円とした。この他の「研究助成」、「市民社会プログラム」、「成果発表助成」については昨年と同じである。

●情報基盤整備について

財団では 1980 年代初期のワープロ導入に始まって徐々に業務の O A 化を進めてきた。特に、95 年度からは情報基盤整備を事業項目に掲げ、97 年度予算までの 3 ヶ年でコンピュータ・システムの整備を行った。これによりパソコンの上位機種をスタッフ 1 人に対し 1 台当りで配備し、これらを LAN で結び、文書共同管理を行う体制がようやく整った。

また、独自開発の会計プログラム、名簿管理プログラム等は既

に数年来稼働しているが、各助成プログラムに対応したデータベース業務アプリケーションも改良し、申請書受け付けから選考、助成決定後の手続き等の処理向上を図る。これによりニュースレター、年報等の印刷物の作成についても外注経費の大幅削減が可能となる。

特に 97 年度は、データベースについて助成成果出版物目録などの項目をさらに整備し、助成対象関連情報を LAN 上で自由に参照できるイントラネットの構築を目指すこととしたい。

●基金増加の意義

数年来の低金利状況は、活動原資を基金の運用収益に依存する助成財団全体にとって財政上深刻な問題となっている。助成財団センターが本年 1 月に公表した資料によると、過去 7 年間の 179 財団の助成事業費合計推移は、92 年度をピークに 95 年度まで連続して下降線をたどっている。96 年度の決算数値も前年よりさらに減少となることはほぼ間違いない。

トヨタ財団においても、ここ数年事業予算の減少傾向が続き、内外から寄せられる大きな期待に応えることができない状況になっていた。

今回のトヨタ自動車の決定は、財団の財政基盤強化をはかるためのもので、寄付金額は段階的に 200 億円の増額が予定されている。この結果、財団の基本財産は従来の 114 億円から 314 億円になる。財団としては、これを契機に過去二十余年の蓄積を生かしたさらなる展開の方向を目指していきたい。

(事務局長 亀澤 直道 記)

『貝葉写本にあらわれた北タイ語辞典』の出来るまで

チェンマイ・ラーチャパット・インスティテュート
アルンラット・ウィチアンケーオ

●プロジェクトの背景

ヤシの葉に刻まれた貝葉写本テキストの研究を含むランナー*研究が広く行われるようになったのは、25 年程前からのことである。その頃、チェンマイ大学でも、チェンマイ教育大学（現在のチェンマイ・ラーチャパット・インスティテュート）でも、私立のパーヤップ大学でも、学部学生と大学院生のためにランナー学の課程が設けられ、教師たちにもランナー研究が奨励された。そのような環境で生まれた研究成果のうち最も重要なものとして、チェンマイ大学社会科学部において開始され、のち同大学社会科学研究所に引き継がれた、北タイの貝葉写本をマイクロフィルム化するプロジェクトが挙げられよう。

このプロジェクトにより1990年までに撮影された貝葉写本については、カタログができています（Catalogue of Palm-Leaf Texts on Microfilm at the Social Research Institute, Chiang Mai University 1978-1990）。貝葉写本に関するもう一つの重要なプロジェクトは、トヨタ財団の助成を受けてアーナン・ガンチャナパン博士と筆者が1981年に行った研究で、「北タイ貝葉文書の歴史的・原典研究：法律および年代記テキストを中心として」と題された。このプロジェクトの結果、16本の貝葉写本から1,000頁の現代タイ字訳が完成した。私たちが貝葉写本にあらわれる言葉の辞書の必要性を痛感したのは、このプ

ロジェクトを通じてのことだった。貝葉写本から採取した古語のみを集めた辞書は存在しなかったのだ。今日ではもう使われなかったり、意味が変化してしまった古語が多数あって、私たちはそれらの意味の理解に苦しんだ。

そこで、アーナン博士と筆者は、貝葉写本にあらわれた北タイ語の辞典作りへの援助をトヨタ財団に申請しようと話し合った。そうして私たちはこの仕事への助成を与えられた。助成して下さったトヨタ財団に対し、私たちは尽きせぬ感謝の念を抱いている。

●辞典作成の段取り


アーナン博士と筆者はまず最初に、どなたにこの仕事に参加していただくかを考えた。私たちは、チェンマイ大学、パーヤップ大学、チェンマイ教育大学、そして地元の研究者の中から、17名の学者をお招きして、二つの委員会を設けた。一つは17名から成る作業委員会で、もう一つは15名の顧問の方々より成る委員会である。プラスート・ナ・ナコーン教授が私たちの招請に応じて、作業委員と、顧問委員会委員長の任をお引き受け下さった。プラスート教授のご助力には深く感謝している。委員会のメンバーになっ

ていただいたのは、言語の様々な分野の専門家で、例えば音声表記、古文字の手書き、語の意味の解釈、英語訳に長けた方々である。

●見出し項目の内容と配列

私たちは辞典の内容や配列も含めて、委員会にはかって議論した。アーナン博士は見出し項目の内容と配列に最善を期すために、既存のすべての辞典を調べようと申し出られた。話し合いの結果、私たちは一つの見出し項目に次のような情報を盛り込むことで意見が一致した。すなわち、(a)見出し語－貝葉テキストから採取した原語（肉太活字で表す）、(b)手書きランナー文字表記、(c)現代タイ文字表記、(d)発音と音声記号表記、(e)タイ語と英語による語の機能と意味、(f)貝葉写本からの例文、(g)使用テキスト名と引用頁、(h)シャン語、ラーオ語、ビルマ語などの語源。収録語は、現代タイ語のアルファベット順に載せられる。見出し項目の一例を以下にお見せする。

辞典の組み見本

กิ่งเมือง 	กิ่งเมือง (เมือง) / กิ่ง-เมือง / kins- <i>meu</i> ก. ปกครองบ้านเมือง to rule, to reign ในเมื่อเจ้ากรมคำวางมากิ่งเมือง / ๗ 1/จกม/99 กิ่งเมืองคำทวาย / กิ่ง-เมือง-ทวาย / kins- <i>meu</i> - <i>kwai</i> - <i>hai</i> :6 ส่วนน. ทัพทวาย to lose all, to go to ruin เหตุว่าทัพทวาย กิ่งเมืองคำทวาย / ๗๖๖/12 กิ่งวี / กิ่ง-เว-ลี / kins- <i>we</i> - <i>li</i> :1 น. กิ่งวี- กิ่งเวเทวี Kinsree, a mythical female bird with a human head ทั้งกิ่งวีและกิ่งเวเทวี / ๗.๖๖๓/ก.๒/15 กิ่งยศ / กิ่ง-ยศ-นัด / kins- <i>sat</i> - <i>not</i> :6 ก. ส่วนน. ทัพยศยก to take an oath, to swear ธีว่าเจ้ากรมคำทวายได้ยกทัพขึ้น มีชายซึ่งทัพยศยกขึ้น / ๗๖๖๖/1/12 กิ่ง / กิ่ง / kins:2 น.1 ดวงชะตา (ไทใหญ่), ฤกษ์ชีวิต horoscope, an individual's fate determined by the precise time of birth ฟ้าไม้เชื่อมตลับภูเขา กิ่งเขาวงกต / คำจกม/138
--	--

この辞典のことを、私たちの顧問の一人でもあられた、チェンマイ大学社会科学研究所のハンス・ベント博士は、「理想的な辞典だ。私は辞書と言うより、ソーラスと呼びたい」とおっしゃってくださいました。

●典拠とした貝葉写本テキスト

私たちは60の様々な貝葉写本テキストから見出し語を抽出した。それらのテキストを分類すれば、次のような種類がある。

- (1)歴史 例：チェンマイ年代記
- (2)仏教史 例：プラチャオ・リアップ・ローク年代記
- (3)聖物の歴史 例：ドーイ・タウン仏舍利年代記
- (4)大ジャータカ物語 例：パーヤップ部大本生経
- (5)ジャータカ物語 例：ローカナイ本生経
- (6)祝祷 例：火葬の祝祷
- (7)仏陀伝 例：アナコッタウォン
- (8)儀礼 例：古風の儀礼
- (9)慣習法 例：マンラーイ法典
- (10)文学 例：プアラウォン・クライソーン
- (11)民話 例：プラーヤ・チュアン大物語、四つ耳五目虫物語
- (12)倫理教訓 例：マンラーイ王の教え
- (13)俚諺 例：ランナーの諺
- (14)詩文 例：クローン詩ニラート・ハリブンチャイ
- (15)占星術 例：占星術教本
- (16)伝統医薬 例：ランナーの生薬
- (17)石刻文 例：ランブーン碑文

●辞典の完成まで

私たちは月に一度、委員会の会合を開

いた。プラスト教授は毎回欠かさず出席された。委員は全員、会合の前にその日扱うテキストを読んでおかねばならなかった。会合の席上でもう一度テキストを読み、収録する語を選んだ。選んだ語をカードに書き出し、語の機能、発音、音声記号表記、意味、語源について議論した。会合の後で、話し合われた見出し項目のすべてを、プロジェクトの代表である筆者がコンピューターに打ち込んだ。私たちは一回の会合の度に、およそ100から200の語を片づけた。収録語の数が500に達した時、それらを印刷し、すべての委員に郵送した。顧問の方々の住所は北タイの7つの県に散らばっている。チェックをされる顧問の方々からの返事を待つ、時には1カ月あるいはそれ以上の時間が経過した。返事が出そろったところで、作業委員会が検討し、難語について意見を交わした後、コンピューター上で最終的な修正を行った。

このようにして、私たちは全部で8,970項目を編集することができた。完成は当初の予定よりはるかに遅れてしまったが、私たちはこの辞典がランナー研究のさらなる進展に寄与することを願ってやまない。最後に、私たちを励ましつつ辞典の完成を待って下さったトヨタ財団のスタッフの皆様にお礼を申し述べたい。(原文英語。翻訳：天理大学・飯島明子)

*「ランナー」は、かつて今日のタイ国北部の中心都市であるチェンマイを中心として、多数のタイ系ムアン(クニ)が連合した王国の名称だった。

東京外国語大学公開シンポ
「文化の未来—開発と地球化
のなかで考える」を開催

1997年3月15日、16日に、浜離宮朝日小ホールで、主催：東京外国語大学、後援：トヨタ財団・朝日新聞社により標記シンポジウムが開催された。朝から夕方までの盛りだくさんの内容とパネリストの熱のこもった討議に、300名を越える参加者からも多くの質問が寄せられるなど、非常に活発なシンポジウムとなった。

内容は、分科会1「文化の混交と創造」、分科会2「開発：地球化とナショナリズム」、分科会3「マイノリティ：差異の力学」、分科会4「言語：一元化と多元化」、総合討論、および特別講演「文化はどこへ行くのか—現代文化批評とポストコロニアル文学」(サーラ・スレーリ・グッドイヤー、イエール大学教授)である。アジア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、南米など世界中の文化や言語の専門家である東京外国語大学の17名の教官に加えて、学外からも11名の専門家を招いて、それぞれのテーマについて専門的かつ、分野横断的で柔軟な議論が展開された。

本シンポジウムは、1995年1月に開催されたトヨタ財団設立20周年記念シンポジウム「21世紀アジア太平洋の文化の課題」の基調講演者であった東京外国語大学の川田順造氏が主唱して、同シンポジウムの発展形として企画・実施されたものである。(牧田 記)

アジア国際公益団体会議の開催

プログラム・オフィサー 牧田 東一

アジア国際公益団体会議が、日本およびアジアの財団、NGOなど18団体の共催で、1997年2月13、14、15日の3日間にわたって開催された。この会議は、アジアの助成財団（民間、政府系の両方を含む）、事業財団、研究所、NGOなどで何らかの国際的な活動を行っているところが集まり、アジア域内での同種団体のプログラム・スタッフのネットワーク作り、および共同事業の可能性を探ることを目的としたものである。会議には、アジアの10ヵ国から36名の正式参加者、日本からも同じく36名の正式参加者があり、加えて、米国、オーストラリアを含む5カ国と日本からのオブザーバー13名が参加した。

海外からの会議参加者は、原則として旅費を自己負担することとし、滞在費については国際交流基金アジアセンターが負担、旅費負担の困難な参加者（NGOなど）については、トヨタ財団と笹川平和財団が助成を行った。

●経 緯

本会議は、1996年2～3月に行われたアジア国際公益団体調査のフォローアップとして実施されたものである。この調査は、今回の会議の日本側主催団体のプログラム・スタッフが中心となって、アジアの10の国と地域を対象に、アジアのフィランソロピーの実態を調査し、特に域内での財団間協力の可能性を探ったものである。（報告書希望の方は、トヨタ財団

まで。ただし、余部に限りあり。）

●アジア地域内での財団・NGO間協力の可能性が検討された3つのテーマ

バンコクでの準備会合での検討を踏まえて、本会議では「環境問題」「市民社会」「文化交流・文化協力」の3つを、アジア域内での財団・NGO間の協力の可能性を探るテーマ領域とし、会議では3つのグループに分けて、共同事業の可能性が具体的に検討された。

<環境問題>

環境グループでは、2つのプロジェクトを共同実施することが決定された。第1のプロジェクトは、これまでアジア域で行われた既存の環境政策、アクション・プログラムの調査と評価である。

第2のプロジェクトは、公平性、環境と開発、生活の質の3つの課題を含む持続的開発のための統合的アプローチの3年計画のプロジェクトである。統合的というのは、水、固形廃棄物、エコツーリズム、気候変動、エネルギーと再生資源などの個別課題を別個に扱うのではなく、相互の関連性を重視し、上述の3つの角度から統合的に検討するということである。

<市民社会>

市民社会グループでは、2つの共同事業を企画・実施することとなった。

第一の研究・調査プログラムでは、各国の国内レベルで行われている市民活動関連の既存プロジェクトの現状把握を行

う。また、同時に政府・企業・市民社会組織の3つのセクターの市民社会構築に向けての関与に関するケーススタディ調査も行う。

第2の市民社会組織のキャンペーン・ビルディングのプログラムでは、媒介組織（インターメディアリー）の強化、市民社会組織の資金調達力、人材養成力の強化に目的を定めるほか、別途、情報ネットワークの構築のプロジェクトを行う。

<文化交流・文化協力>

文化グループでは、具体的な課題として「文化活動を維持するための経済基盤」が中心的に討議された。共通の認識として到達したのは、実際の文化活動の担い手（芸術グループやコミュニティの伝統文化の担い手）の中に、広い意味の国家の政策枠組みや市場の力の中で、不利な立場におかれている一群の人々が存在し、またこれらの文化活動が社会的に見て存在価値があると判断された場合に、財団・NGOは、これらの文化の担い手が政策枠組みや市場の中で生き残れるように活動する facilitator あるいは enabler であるという点である。

最終的に、このグループでは、1年半ほどの調査プロジェクトを共同委託することが決定された。調査は、アジア域内でこれまでに行われた文化グループの生き残り戦略や支援プロジェクトを対象に、それらがどのような文化グループを対象とし、どのようなアプローチで問題の解決をはかろうとしたのか、その成功・失敗の原因は何かなどを探るもので、10～20事例程度のケーススタディを取り上げる。

●アジア国際公益団体会議の今後について

上記の個別プロジェクトを離れて、会議参加者全体のネットワーク化について、最終全体会議で討議がもたれ、3つのプロジェクトの進行状態を見つつ、第2回のアジア国際公益団体会議を、おそらくは日本以外のアジアのどこかで開催する方向で検討を進めることとなった。とりあえず、6ヵ月後に今回の実行委員会メンバーが再び集まり、3つのプロジェクトの進行状況をチェックし、それによって第2回の会議について検討を行うこととなった。第2回会議が決定するまでの事務局機能は、東京会議のコーディネーターである国際文化会館の田南氏を中心に日本側の会議関係者で担当することになった。

ワークショップ・レポート

市民活動助成から

被暴力女性のための問題解決に向けて

3月11日に横浜市フォーラム横浜において、トヨタ財団と横浜市女性協会の共催で表記ワークショップが開催された。

このワークショップは、日本各地で「女性に対する暴力」の問題に取り組んでき

た方々の経験をもとに、問題点や課題を洗い出し、解決に向けての具体的な方策を探ろうという趣旨で企画された。

参加したのは、これまでトヨタ財団の市民活動助成で女性への暴力の問題に取り組んできた5つの団体（かながわ・女のスペースみずら、女性の家サーラー、女のスペース・いがた、JVC山形、女のスペース・おん）を中心に、この問題に関心をもつ支援団体、行政、医療、福祉関係、警察関係、研究者などで、全国から100名ほどが集まった。

討論は8つのサブグループに分かれて行われた。A法律・制度、B医療、C女性政策・コミュニティー向けプログラム、D1相談援助ケースワーク、D2相談援助カウンセリング、E調査研究・方法、Fソーシャルアクション・メディア、Gシエルター活動である。それぞれに事例をもとに問題解決を目指した活発な議論が展開された。(写真)

このワークショップの詳細についてお知りになりたい方は、フォーラム横浜(TEL045-224-2000 担当:桜井)までご連絡下さい。

研究助成から

ベトナムとの共同研究について

3月26日(水)、都内(新宿三井ビル会議室)において標記報告会を開催した。

今回の報告会の目的は、ベトナムに関する具体的な研究事例の報告をもとに、研究および関係者相互の情報交換を行なうことであった。このためベトナム研究者、ベトナムをフィールドとするNGO、ベトナムへの支援を行なっている助成団体等、約50名の参加があった。

報告会では、先ず現在進行中のベトナムとの共同研究プロジェクトについての中間報告が行われた。

それらは、板垣明美氏(横浜市立大学・専任講師)による「ベトナムの文化・社会的な変化の中における固有の医療についての医療人類学的研究」、川上剛氏(労働科学研究所・主任研究員)による「ベトナム農村の生活・労働条件改善に関する実践的研究」、重枝豊氏(日本大学建築学部・専任講師)による「ミンマン帝陵建造物の保存・修復」プロジェクト、そして徳丸吉彦氏(お茶の水女子大学文教育学部・教授)による「ベトナム雅楽の過去、現在、未来に関する総合的研究」の4件であった。

次に第2部として、坪井善明氏(北海道大学法学部教授、4月1日より早稲田大学政経学部教授)の司会による総合討論が行われた。

ここでは、報告者、参加者から様々な意見、質疑がだされ、盛会のうちに幕を閉じた。



研究助成研究報告書提出リスト

3月10日現在、以下の研究成果の報告書が財団に提出されています。財団にて閲覧できますが、原則としてコピーはできません。閲覧ご希望の方は研究助成担当までお問い合わせ下さい。

なお、これらの要約につきましては、文部省学術情報センターの「民間助成研究成果概要データベース」で検索、閲覧が可能です。ご利用の詳細については、下記までお問い合わせ下さい。

〒112 文京区大塚 3-29-1 文部省学術情報センター 管理部 共同利用課 共同利用第一係

1994年度研究助成B(共同研究)

課題B1:多様な文化の相互理解と共存

- 94-B1-003 ナイジェリアにおける民族・宗教紛争を抑制するための新しい戦略に関する研究..... F. U. オカフォ
- 94-B1-014 環日本海地域における狩猟文化の基本構造とその変容に関する国際共同研究..... 加藤 晋平
- 94-B1-066 分裂と統合のなかの人口移動と情報ネットワーク -難民・労働力・言語をめぐる地中海文化圏および環太平洋文化圏の比較研究-..... 本村 凌二
- 94-B1-108 日本の小・中学校における外国人子女の適応に関する調査研究..... 高橋 正夫
- 94-B1-141 ヴェトナム雅楽(ニャニャク)の過去・現在・未来に関する総合的研究 -演奏慣習の歴史的復元および文脈変換による新しい保存形態に焦点をあてて-..... 徳丸 吉彦

課題B2:新しい社会システムの提案-市民社会の構築をめざして-

- 94-B2-001 ロシアの市場経済移行と市民社会の条件 -日本からの知的支援の可能性を含めて-..... セルゲイ・ブラギンスキー
- 94-B2-029 長野県小諸地区における外国人支援ネットワークの形成に関するアクション・リサーチ..... 田中 望
- 94-B2-080 タイを事例とした「人権調和型発展」の展望に関する総合的研究 -ジェンダー化された労働の社会的経済的構造分析を中心に-..... 羽後 静子

課題B3:これからの地球環境と人間生存の可能性

- 94-B3-053 「アジア環境白書」づくり -アジアにおける公害・環境問題に関する国際共同研究-..... 秋山 紀子
- 94-B3-126 生存のための農業への転換に関する理論的・実践的研究..... 中村 修

1995年度研究助成A(個人研究)

- 95-A-001 ガーナの高地の環境保全・改善におけるアグロ・フォレストリーの導入に関する研究..... G. O. ンカンサー
- 95-A-007 文化としての植民地 -在日韓国朝鮮女性たちの経験-..... 梁 順
- 95-A-023 ガーナにおける灌漑および排水プロジェクトへの住民参加に関する研究 -運営および維持に際しての農民の費用負担の視点から-..... ニヤマディ B. V. Y.
- 95-A-049 世紀末イギリスにおける「神経障害」の医療技術にみるテクノロジー偏重の人間理解についての研究 -19世紀後半の精神医学と脳科学の技術とその社会化を考える-..... 上山 隆大
- 95-A-080 ラーン・ナーのヴィハン、ポート建築に関する研究 -タイ建築史の再構成-..... 成田 剛
- 95-A-092 環境指標としてのオスミウム同位体に関する基礎研究..... 鈴木 勝彦
- 95-A-111 ヒマラヤ地域の天然有用植物資源の探索・保存に関する基礎研究 -薬物資源の保存と栽培化、データベースの構築と現地住民向けテキストの作成-..... 渡辺 高志
- 95-A-114 経済社会開発が途上国男女へ及ぼす影響の差異とその要因分析 -性別統計・調査によるタイの事例研究-..... 青木 憲代
- 95-A-129 植民地期のインドにおける中間層の形成とその意識 -西インドの都市中間層の社会・文化活動-..... 井坂 理徳
- 95-A-142 フランス南部アルプス地方における、最終氷期末期以降の植生帯の移動に関する花粉分析学的研究 -高山帯における人間活動の影響の解明をめざして-..... 中川 毅
- 95-A-145 社会のグローバル化に伴う農村社会の変容 -山形県の農村地域における国際結婚を通して考察する農村の模索と多様性への対応-..... 仲野 誠
- 95-A-146 農業協同組合による高齢者福祉活動の組織・事業・経営論的可能性 -高齢者を対象とした生活介護活動を素材として-..... 北川 太一
- 95-A-184 清末中国対日教育視察の研究..... 汪 婉
- 95-A-206 ラオス、ヤオ族の宗教行事にみられる社会・文化変容 -年末年始祭祀を中心に-..... 杉浦 孝昌

95-A-209	ホンジュラスの古代文化クロスロード地域における中心部（マヤ文化）と周縁部（非マヤ諸文化）間の考古学的比較研究 — 周縁社会の視点からの古代マヤ文明発展・衰退過程の再構成 —	中村 誠一
95-A-250	イロクワ6ヶ国保留地におけるジェイク・トマス酋長を中心とする伝統文化の保存と継承に関する問題と方法の研究	木村 武史
95-A-260	五大尊画像の研究 — 来振寺本と東寺本 —	安嶋 紀昭
95-A-308	途上国の廃棄物問題に関する研究 — バンコクの都市廃棄物を事例として —	松本 礼史
95-A-326	アジア・オセアニア地域の医科大学における医療倫理教育の国際比較調査 — 伝統的職業倫理と患者の権利をめぐる —	宮坂 道夫

1995年度研究助成B（共同研究）

課題 B1：多様な文化の相互理解と共存

95-B1-066	ヴェトナム雅楽（ニャニャク）の過去・現在・未来に関する総合的研究 — 演奏慣習の歴史的復元および文脈変換による新しい保存形態に焦点をあてて —	徳丸 吉彦
-----------	---	-------

課題 B2：新しい社会システムの提案 — 市民社会の構築をめざして —

95-B2-038	協調型住民参加による交通計画の可能性と課題に関する研究 — 計画制度および市民の参加意識に関する欧米とわが国との比較を通して —	久保田 尚
95-B2-060	ODA（政府開発援助）の大規模開発がもたらす住民強制移住問題に関する調査研究	村井 吉敬
95-B2-089	阪神大震災における「こころ」と「社会」の復興過程に関する心理学および社会学的総合研究	渥美 公秀

課題 B3：これからの地球環境と人間生存の可能性

95-B3-031	ソ連崩壊後のロシア、ベラルーシ、ウクライナにおけるチェルノブイリ原発事故影響研究体制と研究の実状に関する調査研究	今中 哲二
-----------	--	-------

新刊紹介

「中国の出稼ぎ労働者 — 農村労働力流動の現状とゆくえ —

大島一二 著

芦書房 刊 (96.11.15)

A5判 176頁 3,200円(内税)

本著は、1992年度研究助成により「内陸地域から沿海都市（広東省華南地域）への農村労働力の流動現象」について考察を行った「中国における経済発展と人口流動現象の発生・拡大に関する実証的研究」と題した個人研究成果がもとになっている。

構成は、中国の出稼ぎ労働者に関する「民工潮」現象（以前は「盲流」現象と呼ばれていた）について、①中国側の統計資料にもとづくマクロ的な分析、②実態調査結果にもとづくミクロ的な分析、③結論、の3部からなる。

①で扱っている統計については、広東省における1990年度人口センサスなど、既存のものについて丹念に収集されている。また、「戸口制度」（戸籍管理制度）、中国内陸地域の農村経済問題、についても考察されている。

②では、著者によるアンケート調査の結果をもとに、出稼ぎ労働者の特徴について明らかにしている。また、出稼ぎ労働者の出身地域の分析として、経済的状況の把握、さらには出身農村における出身階層（経済的な）についても検討が加えられている。

③では、以上を踏まえて「農村内において比較的経済的に豊かな農家からの出稼ぎ労働者が多い」との結論が提示されている。ここでは、貧困層の崩壊、没落による離村、都市部への流入といったプロセスではなく、むしろ「格差ある所

得を求めての都市への流動」という傾向が指摘されている。

著者によると「出稼ぎ現象は多少の紆余曲折があるにせよ、今後とも拡大傾向に推移するものと考えられる」とのこと。出稼ぎ労働者の総数は現在8,000万人とも予想されている。関心ある方には是非一読を勧めたい。(K.T.)

「円山應舉研究」

佐々木丞平・佐々木正子 著

中央公論美術出版 刊 (96.12.10)

A4判 研究篇510頁 図録篇534頁

61,800円

円山応挙(1733-95)は江戸中期に活躍した写生派の祖といわれる画家である。この時代は、学問の世界では博物学が盛んとなり、またヨーロッパから外科医学書が多くもたらされるなど自然科学的認

識が知識人を中心に広く浸透していった時代である。植物図鑑の挿し絵や解剖図などに写実的な描写が求められたことが絵画にも影響を及ぼしてきた。一方、応挙の人物画においては、人体骨格をもとに肉付けを行い、着衣を重ねるといった正確な描写が図られ、これは明らかに解剖学的な人体理解が基礎となっている。

こうしたことは、本書で実証的に語られる応挙の時代背景と絵画思想形成史、作画理念、構成・描法解析などのごく一部にすぎない。実証的な裏付けとして、膨大な資料から抽出された落款・印章の精密な照合分析にもとづく作品の同定、編年が行われている。

著者二人の三十年におよぶ応挙研究の集大成だから大変な学術書である。にもかかわらず、記述はきわめて平明で、ひとつひとつの絵から解き明かされる世界は、日本美術史にまったく関心のない人でさえ十分楽しめる知的エンターテインメントの世界だと思う。

財団は本書成立の端緒となった、売立目録に基づく画像データベースの作成に対し1985年、86年に研究助成を行った。(M.K.)

「インドネシア占領期文献目録」
 インドネシア日本占領期史料フォーラム編
 龍溪書舎 刊(96.12)
 B5判 388頁 本体価 12,000円
 この目録は、第二次大戦中のインドネ

シアにおける日本占領期(1942年3月～1945年8月)に関する総目録である。収録対象は、書籍(学術書・一般書・回想録等)、雑誌論文・評論・随想、さらには主要なインドネシア関係の戦友会、親睦団体の会誌に収められた証言、回想記、そして防衛庁防衛研究所戦史部図書館が所蔵する文書・記録にまで及ぶ。

これをまとめた「インドネシア日本占領期史料フォーラム」は日本の研究者、専門司書などからなる研究グループで1986年以来活動を続けている。すでに91年に同じ龍溪書舎から、関係者のインタビューにもとづく「証言集—日本軍占領下のインドネシア—」を刊行している。

今回の目録では書籍をはじめすべての資料に英訳を付しており、これにより従来、諸外国の歴史研究者から“ブラック・ボックス”との指摘を受けていた時代に関する今後の研究の足がかりを築いたものといえる。財団では1985年度以来数次にわたってこのフォーラムに対して助成を行ってきた。(M.K.)

「ルイジアナの墓地 — 死の景観地理学」

中川 正 著

古今書院 刊(1997.2.28)

A5判 300頁 本体価 9,000円

財団が本書著者の「ルイジアナ墓地の地域特性に関する文化地理学的研究」に対して助成を行ったのは1984年である。

当時、著者はルイジアナ州立大学の大学院に在籍する27歳の若手研究者であった。

今回の著作はこの時期からの蓄積の上にたつもの。著者が日本の3分の1の面積を占めるルイジアナ中を駆けまわり、訪れた墓地は400、観察した墓は25万に及ぶという。

ルイジアナにはカトリック、白人プロテスタント、黒人プロテスタント、ユダヤ教徒といった人種、宗教によるさまざまな地域集団があり、そうした地域の特性が墓地の形式、墓石の様式、埋葬形態などに反映している。著者は「死の空間では、アメリカ人は現世社会で経験するイデオロギー的な緊張から解放され、正直な感情に従って集団ごとの景観をつくる。」と記述している。景観地理学とはどういう学問かということの一端を理解することができる。(M.K.)

訃報

当財団の理事として長年にわたりご指導いただいております富永誠美氏((社)日本交通科学協議会名誉会長)は、去る平成9年1月23日にご逝去されました。

氏の多大なるご功績を偲び、ここに心よりご冥福をお祈り申し上げます。



トヨタ財団レポート No.79

このレポートを継続してご希望の方は、お葉書にて財団までお申し込み下さい。

発行日 1996年5月15日
 発行所 財団法人 トヨタ財団
 発行人 黒川千万喜
 編集人 久須美雅昭
 印刷 真友工芸